

浜善丸まで続いた発動機船の名である。

分家筋の八戸市故熊谷義雄代議士は自分の経営する熊谷漁業部所属の持ち船に番号を打ち、第一浜善丸第二、三、五、八、十、十五、再び八、三十五、三十八、五十一、五十五、五十八、六十三、六十八、八十八、以上の計十六隻にすべて浜善丸と命名した（関係者による）。

金子氏は〈浜坂〉七代当主熊谷東亜子氏に電話し何か賢治の書き物でも残っていないか尋ねたが何も無いとのことであった。

木村東吉先生の第十六章〈三陸旅行詩群〉考——詩群の有機的構成と

その変容——

その二一二頁の参考資料の注4に大向直三「小袖部落の近代史自費出版杜陵印刷一九七八年十月」があり、文中に「黒崎に幸徳丸、太田名部に、大正丸、堀内に浜善丸、下安家に光徳丸……」の説明文がある。私は普代村郷土史編纂委員長久慈市の大森竹之助先生からこの本の該当頁コピーを頂戴した。それによると

漁船の動力並びに沿革  
右のような小題の中の一文に



4月28日ネダリ浜の「白壁」を背に。帰省中の熊谷さん。

う。この道を賢治が私と逆に普代から羅賀へ歩いたとすれば木村東吉先生がとりまとめた口語詩集発動機船 一 下書稿 三 番稿

「この頃に至り各地とも小袖を見習い発動機船の建造が進み、機動力による遠洋漁業の勃興期に入ったのである。」

これを契機として宮古以北は急激に機械船ブームを呈し、先ず黒崎には幸徳丸、太田名部に大正丸……とあり海岸の部落名と船名のみで文章で旅行者宮澤賢治の行動と関係した文章ではなかった。

三 旧街道

三陸鉄道普代駅近くに羅賀坂という隣村田野畑村の羅賀へ通じる道がある。筆者は昭和二十一年旧制中学の時九月の連休を利用し、大正五年に設立（関係者による）された羅賀丸という廻漕船で早朝宮古を出発、田野畑村平井賀港に着き、徒歩で羅賀を通り、山越えをして羅賀坂を下り普代元村の上の方へ出たことがあり三時間位を要したような記憶がある。

当時は狭い山道だったように思

うつくしい素足に  
中略  
わずかな砂のなごさをふんで  
石灰岩の岩礁へ

後略

「砂のなごさ」が黒崎の「ネダリ浜」弁天漁港であれば、とてもこの羅賀へ行く道から海辺は見えないし、いわんや普代の人が「白壁」と呼んでいる「石灰岩の岩礁」など見えない。

賢治が羅賀坂ではなく、海岸を通ったとすれば当時シーサイドラインは通っていないから太田名部の海岸から黒崎への旧道坂道を登り黒崎台地へ達し、沢を下って「ネダリ浜」へ出て「白壁」を眺めたかも知れない。

あるいは普代浜や太田名部浜の美しい砂浜を賞でてから小船でも出してもらって「白壁」を眺めたり「ネダリ浜」で時を過ごしたものであろうか。

この白い岩は石灰岩ではなく、正しくは石英粗面岩というそうであるが鉱物学的表現はともかくとして、木村東吉先生の第十六章〈三陸旅行詩群〉考——詩群の有機的構成と

その変容——

その二〇五頁には「従来いわれてきたように、作者が発動機船に乗ったのは地理的にみてもおそらく羅賀ではない」と書いておられる。

賢治は宮古への船便は別の場所から乗り、船から「白い岩」を眺めたものであるうか。木村先生は「作者が便船に乗った港はどこか確定できない」とされ、地理及び便船の状況からして羅賀以外の安家（下安家）堀内、太田名部の三つの海岸部落をあげておられる。それが正しければ羅賀は宮古へ行く賢治を乗せ途中で寄港した港ということになる。そのほうが賢治の詩の

発動機船 三

石油の青い火花のしたで

中略

町のうしろの低い丘丘も見えてきた

羅賀で乗ったその外套を遁すなよ

この最後の一行は私のような素人には自然なように感ずる。平成十四年より数えて七十年前、宮澤賢治は難しい謎を普代村に残したものである。